

に考へてはならない。郷土史の解明にはこういうことは問題でない。郷土社會に生活する一員として自分達のあり方をはつきりつかみたいからである。なお郷土社會史研究の

方法としていろいろ考へたいこともあるが、それは次の機會にゆずりたい。

(筆者・廣島大学教授・本学講師)

中世末期に於ける社寺の勸進について

村 山 修 一

一

ここへのべんとする勸進とは、社寺の建立乃至修造にあり、その資を得んがために行はれるものを指し、特にそれが盛んとなつた中世末期すなわち應仁の乱後の京都について考察しようとするものである。

さて勸進の古い例としては、奈良時代における東大寺大佛建立の際のものが著聞し、聖武天皇親しく國民に呼びかけて「如更有人情願持^{下二}一^一枝草一把土助造像者恣聽之^①」と云はれ、行基は弟子を率いて廣く衆庶を勧誘したと云われる。その結果莫大な寄進を集めて遂に成功したこと、周知の

通りである。この様に國家の權力を背景として行はれたものに對し、純粹に民間人で寺院造營に勸進を行つたものは空也である。天曆五年(951)上人が衆人をすゝめて洛東に六波羅密寺を建てた際は、西光寺という小規模のものであつたらしいが、十二年を経て、應和三年(963)堂宇完備し、ここに始めて民間人の、而も多數庶民の参加による立派な寺院の建立が實現した。寛弘二年(1065)の革上人行円による行願寺建立も恐らく民衆の喜捨になるものと思ふが、記録に徴しえない。何れにしても當時一般庶民に寄進を請うて民間人が寺院を建立する例は末だ少なかつたと

誣はれる。しかし佛教の流布につれて庶民にも寺院の建立する者が多く、一方では朝廷の政治的經濟的支配力衰へて之を援助することが困難となつた爲、勸進がしきりと行はれる様になり、文献の上に勸進の語が漸くあらわれるに至つた。例えば、山槐記には治承三年（1173）二月、南無阿聖人なるものが、三井寺大衆に焼かれた關寺再建の爲、靈山の邊で通行人に別米一升の勸進を行つたことが見え、今昔物語にも播磨國へ勸進に下つた僧の奇篤な行爲が記されてゐる。また濫觴抄によれば、寺院ではないが、保延五年（1139）五條橋架橋に勸進の行はれたのが勸進の先例であるとされてゐるところからも、勸進という募金の形式が廣く知られる様になつたのは平安末であることが考えられる。このことは莊園の發達により階級分化がすすみ、武士の擡頭、商工業者の進出によつて、庶民の經濟力が増大し文化的向上への要求と相俟つて、社寺の勸進に應じうる能力と意欲が高められたことに大きな原因があると考えられる。之に加えて、鎌倉初頭より新佛教運動が興り、僧侶の遊歴する者増加すると、地方では喜捨其他の物質的施物の

風を助長し、之がまた勸進を普及せしめるにあたつて大きな働きをなした。

（遍歴僧や之に類するものについては後に述べる）

かくて中世より勸進は宗教界に於て左のみ珍しからぬものとなつたが、その先陣を承つたのは治承承から文治にかけての東大寺大佛復興であつた。この際も朝廷からの有力な財力援助があつたがすでに創立當時とは全く事情を異にし具体的には後白河法皇が發意され、之に一部の公家が同調したものである。また勸進職には有名な倭乗坊重源が之に任ぜられ、廣く七道諸國を車にのつて勸進したと傳えられるしかし特に之には源頼朝の奉加が非常な援助となつたのであつて、幕府の後援こそ復興を著しく促進せしめたものであつた。こゝに注意されることは、重源が淨土の系統の人で舊佛教に屬する人ではなかつたということである。同じく東大寺勸進の一役を買つて東國巡禮に出た西行も念佛行者であつて舊佛教の信者ではなかつたのであるが、この様に淨土系を主とする新佛教徒が勸進に従事することは今後次第に盛んになつてくるので、その理由は(1)地方佛教に

勸進を利用したこと、(2) 舊佛教の勢力内に優透するための手段として勸進を利用したこと、(3) 父澄憲と共に唱導の大家であつた安居院聖覺が法然の弟子となり、爾來說經々化をなすものは念佛宗に最も多く輩出したこと、等であろうと考えられる。(1)(2)は確かに重源も實行したところで、殊に東大寺復興後も同寺と關係を持ちつづけ、同寺の地方莊園内に淨土堂を建立し、淨土信仰の扶植に努力したことはすでに論證されているところである。(3)についてはなお一層研究の余地はあるが、説經が勸進にあつて重要な役割を努めたことは云うまでもないところ、なお説經を職業とする説經僧や勸進を名目として事實上は乞食を渡世の業とする念佛聖を寺奴の階級的桎梏から解放したものが淨土宗であつたことも併せ考えねばならない。

鎌倉の中期である貞應二年(1223)には、讃岐國屋島峰千光院の洪鐘を新調するため、同地の住人で勸進聖人となつた蓮阿なるものが、京都六條町へ勸進に來て居り、之も念佛行者の勸進を行つた一例とみるべく、同時に六條町が商工業者の多く住んだ地域であつて、勸進の有力な對象に

この様な階級が浮び上つて來たことは興味ある事實である。

二

やがて南北朝を経て室町時代に入るに従ひ、莊園の崩壊いよいよ急にして、社寺領は武士の蠶食甚しき爲財源に脅威を受け、堂舎の修造も到底自力ではなしえないものが増加し、ここに勸進の必要はさらに加はつたのである。殊に京都は南北朝以來、兵亂の爲社寺の隆替著しく、一方では土倉酒屋等富裕な市民の擡頭につれ、これらの階級を主なる助縁者とする勸進が行はれたが、應仁の大亂により一舉に夥しい京洛の社寺が被害をうけるに及んで、勸進の流行に一層の拍車をかけることとなり、織田信長の入京により政局が安定し、社寺の經濟的地位が保護されるまで到る所勸進の募金運動が行はれた。われわれはここに中世末期の勸進を通じ、中世の宗教が近世社會へ、如何様な變貌をとげつつ吸收されてゆくかを最も端的に把握しようと思つのである。

幕府の庇護最も厚かつた禪宗、殊に京都に有力な根柢をもつ臨濟宗は、亂後暫くは將軍から濫發される坐公文の禮

錢寄進によつて修造復興等が行われることが多かつたが、義政以後は將軍の權威全く地を拂つた結果、塚など兵火の被害を受けなかつた土地の富裕な商人と師檀關係を結び、あるいは地方大名や土豪の歸依をうけ、その助縁で再興をなした。之に對し、淨土系寺院や念佛行者が關係した社寺は前述の様に盛んに勸進を行い、活潑な復興運動を行つた。ただ舊佛教の寺院にして、單に皇室の權威にのみ頼つてきたものは、維持復興共に最も難澁を極めた様である。従つて勸進を當面の問題とする本篇では、勢い淨土、念佛關係の寺院の考察が中心となるのは當然である。以下數ヶ所の社寺について具体的に説くこととしよう。

まづ清水寺であるが、この寺は文明元年（一〇五〇）七月、東軍の爲に焼かれ、別當任円は責を負うて職を辭し、寺は一時五條東洞院へ移つた。同三年大内政弘は朝廷に對し使を派して、清水寺再建費として四万緡及び藏經を望んだが目的は達せられなかつたものの如くである。其後同九年十二月漸く舊地に粗末な仮段を設けて落ちつき、翌年まづ梵鐘鑄造を行つた。これが現在の梵鐘で、その銘によると願

主は願阿上人とあり、晴富宿禰記に十穀坊主とあるのが之に當るらしい。内裏西邊なる土御門室町邊で仮屋をかけ、大法師還秀及び鎮秀の手で鑄造が始められたが、近隣より都人群をなして之を見物し、いよいよ工成つて寺へ運ぶに當つては、また洛中の人々合力して力軍をもつて之を引いた。途中車の輪が屢々損じて運搬に並々ならぬ苦勞をしたが、力車の上には風流をほどこし、猿や粹のをせて啜物入りで引いた爲、女房子供に至るまで押し掛けて之を見、非常な賑ひを呈した。現在の梵鐘は銘が可成り磨滅してよみ難いが、池の間始め中帯に永泉・西母・宗詠・宗仲・宗順・惟信・長承・則慶・妙春・道祐・得光、西道、明正、文遠妙觀、妙音等多數の町人信者と覺しきものの結縁者名が刻され、中には女人らしき法名も見られるのである。梵鐘が出来る時、ついで本堂再建が計画され、矢張り願阿が勸進聖となつて諸國遊歷に出かけた。成就院文書によつてその奉加帳をうかがうと、京都では義政夫人日野富子、日野勝光、同政光、同苗子、三寶院義覺等合して材木六本分百二十貫文、伊勢貞宗は五本分百貫文を寄進しているが、地

方では多數の有力者がこれに参加しており、越前の朝倉一族九人で百三十九本二千七百八十貫文、其他同國の人々四十一人で五十四本分千八十貫文を、出雲國人三十三人で十四本分二百八十貫文、丹波國人八人で六本半分百三十貫文周防國人六人で六本分百二十貫文を出しており、其他播磨

・但馬・能登・筑前・攝津・和泉・三河・尾張・備後等諸國の人々が少々寄進している。以上めて三百二十六本と十五貫文、すなわち六千五百三十五貫文が集められたのである。④其他盆・香合・太刀・馬等現物を出した伊勢國人もあつた。とにかく中央よりは地方の人々が熱心であつたことがしられ、階級としては地頭、名主、武士より神官百姓等までわたつているものと見られるのである。願阿はさらに九州にも勸進の爲下つたので、幕府では薩摩守護島津武久をして大隅・薩摩・日向の人々の助縁を命じた。かくて文明十四年八月造營開始、同十六年六月落成し、盛大な供養が行われたが一切の費用は願阿の盡力によるもので、寺家當局は何をする力もなつた。一体この願阿という人は七條時衆であつて、越中の人とも(碧山日録)筑紫の人(臥雲

日件録)ともいい、四條橋を架したほか、南禪寺佛殿再興に百貫文を寄進し、あるいは將軍から百貫文の助縁を得、六角堂において貧者數万人に對する粥や羹菜の施しを行い、のち上人号を贈られた。⑤謂はば勸進を一つの職業とした時衆の徒であつたのである。

次に誓願寺は清水寺と同じく、もと南都系の寺院であつたのが、天台の管下に移り、而も淨土宗とも深い關係もち、朝廷公家方面にも信者が少くなかつた。また一遍がこの寺に於て法事を修し、「六十万人決定往生之紙符」を諸人に與えたという傳えを有する様に、時衆とも交渉があつた。自ら民衆にも親しまれ、文明以後天正頃に至るまで三、四回復興改修を行つたが、その都度勸進には貴賤を問はず多數の人々の奉加を受けた。最初の文明九年(1474)の回祿には將軍義政自ら錢万疋を寄進した爲、直ちに本堂造營行われ勸進聖には十穀沙門と号する僧侶が之に當り、一條兼良も勸進帳に揮毫した。⑦落慶供養に際しては、朝廷より莫大の奉加があつたと云われるが、このほかさきに清水寺梵鐘鑄造行われた場所で勸進猿樂催され、之より相當の

収益を得たのが役立てられたであろう。しかし何分にも復興を急いだこととて建築は本格的なものではなかつたのか三十年経過する間には朽損甚しく、再度新築の必要を生じた。かくて永正十五年(1518)の新堂造営には二万貫の寄進があり、また天文八年(1583)には同寺勸進帳に宸翰を染められている。同年幕府は何故か誓願寺の末寺たる干本閻魔堂及び諸勸進所の再興を停止したが、とにかくこれを以て、この寺の造営には、幾つかの勸進所が設けられ、組織的な活動が行はれたことが窺われる。勸進所再興停止の處置は寺に与つて迷惑であつたと思われるが、六年を経た天文十四年、漸く梵鐘を北野において鑄造し、翌年堂宇の上棟をみた^⑪。然るにその復興充分でなかつたのか、天正元年(1573)に入り泰翁出で、諸國に再建の資を募縁し同二年、勸進僧楚仙及び清善が諸國勸進に盡力したのであつた^⑫、この二人も淨土系統の僧侶であつたらしい。

誓願寺と同様天台系の寺院で淨土宗の傘下に入つた清涼寺は、永正六年改築にあつて有名な釈迦像を六波羅密寺に開帳せしめ大いに勸進に努めた^⑬。之には本覺寺の玉翁が

盡力したらしく考えられる。其後勸進僧堯淳なるもの大いに復興に努力し、天文二十一年(1622)には、ほゞ舊態に復したが、文明十三年(1481)より復活した大念佛行事は民衆を勸進するによい機會を作つたものであつた。念佛行事は應仁乱後特に流行したもので、北山鹿苑寺門前東の阿彌陀堂にても民間の有志によつて念佛踊が張行せられ、その盛んなること嵯峨大念佛の如しと云われた^⑭。四條道場の念佛踊などは見世物的な行事となつたが清涼寺が念佛行事を復活したのと相前後して、壬生地藏堂(寶幢三昧寺)でもその向うを張つて大念佛を創めた。

この寺は地藏信仰により都人の參詣多いところで、文明十一年には堂舎修理の目的で勸進曲舞を催し、越前國幸若大夫をして之を演ぜしめた。住持隆円の勸誘をうけて細川政元以下禪僧や公家が見物に赴き、相當の奉加をなした模様である^⑮。同寺信者の一人である入道道善なるもの、自ら勸進して築地中門及び塔の修理を行い、寺觀次第に舊に復したから、翌年には地藏開帳を行い、將軍も參詣して幾許かの奉加をなした。蓋し祕佛の開帳と娯樂物の興行は、當

代の都市に於ける勸進の最も効果的方法であつたのである
眞正極楽寺（眞如堂）も誓願寺同様、天台の管下にある
淨土系の寺院であつたが、應仁の乱には難を避けて近江坂
本穴太に移り、文明十年再び洛中へ戻つた。しかし本尊は
住持長諱によつて京都一條町なる元應寺に安置され、惠忍
上人等により供養行われ、鐘の鑿造などを始めた。文明十
六年六月將軍義政自ら施主となり、その復興をはかること
になつた。この際義政は菊亭家及び青蓮院の間で争つてい
た花園の田二町を勸進して常燈明料に充てている。^⑮かくて
漸く堂宇再建に取掛り、九年の明應二年（1493）八月落慶
供養があつた。その復興の容易ならざりしを察するであろ
う。其後大永元年（1521）にも將軍義晴より太刀馬等の寄
進をうけて堂の供養を行つており、降つて天文十三年（1544）^⑯
には勸進猿樂を催しているが、この際も佛堂の改築又
は修理があつたものである。このように同寺は將軍の援
助があつて復興されているとはいへ、實質上の寄進額は僅
かでは大むね民間の勸進に俟たねばならなかつた。いま
同寺に残る永正年間の同寺々頼目録をみると、大むねそれ

が寄進によるものであり、且場所は主として京洛附近であ
る。寄進の時期は應仁以後が多く、それが明應前後と永正
頃に片寄つているのは、上述明應二年及び大永元年の堂宇
復興に關係があるとみられる。恐らく寺の勸進に應じたも
ののうちで、土地を寄せたものあつたことを示すのであ
ろう。寄進者は單にその名前からは正確に判定しえないが
公家はたゞ四條隆直同隆永の二人で、他は武士、百姓が目
立ち、之に女性らしきもの、僧人にして法名をもつたらし
きものなどが認められる。なお應仁以前に屬するが、嘉吉
二年（1432）に、尺阿道場時衆連阿なるものの寄進が見え
ているのは、淨土宗寺院と、時衆との關係を示すものと
して興味深い。

北に轉じて鞍馬寺をみると、こゝは應仁以前長祿二年（1330）に災に遭つてゐるが、復興勸進は一向にはかばかし
くなく、上棟してより二十四年後の文明十三年（1481）に
漸く本堂造營成つた。勸進に當つたのは百六十才と自稱す
る盛善なるものであつた。奇異の僧だと云はれた点よりし
ても、寺僧に非ず、遊行者らしいことが推測される。同寺

は永正八年(1511)にも修造を行つてゐるが、この際酒麴役を造營料に宛て、ほしいと陳情した²¹⁾。許されなかつたが地方の寺院では思ひ付かぬ計画であつた。

次に一二、神社について述べよう。まづ都人に親しまれた祇園社は、應仁元年(1467)の火災に荒廢してから容易に復興しなかつた様で、文明十一年誓願寺建立の勸進聖であつた十勢某が自ら勸進聖と、同十三年貴賤多數の助縁をえて上棟した。この際の復興が全く民間の手によることは誓願寺や眞如堂などの場合の様に勅使が來ず、幕府からも有力者が參列せず、改つた日時定の儀が行われなかつたことから知られる。その後明應五年(1496)閏二月になつて社殿修理の爲また諸國勸進が行われた²²⁾。幕府よりは祇園會復興が指令されたが、容易に立直らず、明應九年(應仁の乱終つた文明十年よりは二十三年目にあたる)幕府はせめて紳だけでも立て、祭儀を備す様督促し、雨中兔に角最略儀を以て事を濟ませた、鉾はわづか一つであつたという。而もこの状態すら續けることが出來なかつたと見え、文龜元年(1503)また幕府はその執行怠慢を責めてゐる。この

際、大舍人が神役に従はないのを詰り、彼等をして役錢を收めしめ、之を神事要脚に宛てようとしてゐるのである。祭が本格的に復興するに至つたのは永祿に入つてからで、明應九年よりは、さらに八十年余の後のことであつた。このことは洛中の祇園社領内に住む町人の經濟的回復が充分でなかつたに起因しようが、また念佛信仰程に神祇信仰が都人の關心を引かなかつたからであらう。

御靈社も同様で、兵乱勃發と同時に眞先に焼かれた社がどの様に復興されたか詳かでないが、遙に下つて永祿三年(1560)には、御靈社別當が洛中洛外に勸進して社殿造營に盡力してゐるに拘らず、効果上らず、結局天正三年(1575)信長に縋つて尾張國に募縁し、漸く復興の緒に ついたのであつた。

三

以上幾つかの社寺についてのべたところからも知られる様に、復興に際して活躍した勸進僧は、その當事者以外に屢々他所から來つたものが之に任じており、中には職業的なものもあつたであらう。清水寺の勸進聖願阿については

すでに記したが、前述本覺寺を創めた玉翁は、眞如堂、六波羅密寺、清涼寺、石山觀音堂等の勸進聖を勤めたと云われ、越後出身の念佛僧であつた。²⁰⁾ またのちに清涼寺の勸進に當つた堯淳は天文二十一年(1552)因幡の大安樂寺の勸進聖となつており、²¹⁾ 天文九年には北野經王堂修造の勸進にも奔走しているところからみて、あちこちの社寺を巡つた廻國聖ではないかと思う。何れにしてもこの三人の勸進僧とも上人号を賜つているところからみてその活動は華々しいものがあつたに相違ない。因みにこの頃の廻國聖については吉備津彦神社文書に、文明三年(1471)同社に廻國聖が、法華經を奉納していることを記しているし、遊行者の中心地とみられる相摸清淨光寺では、遊行上人意樂が永正十一年(1513)諸國遊歴に出掛けるに際し、幕府の指令により各地の守護の保護をうけていた。同十四年意樂は美濃國に一寺を創建し、將軍義植から褒状を與えられた。其他寺奴出身の念佛聖の遊行に至つては隨分の數に上つたことであろう。尙これについては後にも少しくふれてみたい。

既述の誓願寺及び祇園社の勸進聖は同一人でその名は明

かでないが、播磨の大山寺文書によれば、同寺の僧徳阿は祇園社と特別の關係があつたらしく、その旨をうけて弟子願阿(清水寺のとは別人であろう)が永正六年(1509)の造營に盡力している。この兩者その法名から推して淨土系の僧侶らしいが、大山寺が念佛宗と如何なる關係にあつたかは改めて検討する必要がある。

かように勸進僧には京都以外の出身者が多く、彼等は京都の宗教界の荒廢に乗じ、上洛し來つて勸進の一役を買ひ華々しい活動によつて一躍その名をあらはしたものである。勸進にあたつては、まづ勸進帳が造られるが、之に權威を與えることが多數の結縁者を獲得する所以であるから、その爲に勸進帳の題箋や内容に、皇室乃至は公家の揮毫を受けることが盛んに行われた。従來名も知られぬ地方の社寺が皇族や公家の能書家に由緒縁起の染筆を要請する様になつたのも、恐らく京都に於ける勸進が盛んになつた影響であると思う。何れにしてもこのために活躍の場所を與えられたのが勸進聖である。彼等は社寺復興という重大な使命があるばかりに、容易に貴顯紳士の門を敲き、禁中に推參

することが出来た。朝廷でも公家でも之に應ずることによつて、勸進聖からは禮物を受けられたので、あながち先例を墨守して彼等の願ひを却けられることはなかつた。尤も揮毫のみならず進んで奉加しなければならぬこともあつたが、必ずしもそれは額の多少を問題とせず、むしろ尊貴の奉加がもつ宣傳的效果が期待されたのである。かくて勸進聖の禁中出入煩繁となるや、余りに見苦しいからとて、永正十二年(1515)將軍義植は商人と彼等の參朝を禁止せんとした。^④將軍の命をうけた公家が、これについて上奏したところ、長橋内侍は答えて、この様なことは、先帝である後土御門天皇の時以來、つまり應仁以後の慣習で今更止め難いといつた。結局禁止は行われなかつたのであろう。公家で揮毫に應じたものとしては、三條西實隆が清水寺・清凉寺・眞如堂・千本閻魔堂・竹生島・建仁寺大昌院の爲に、一條兼良が誓願寺、近衛尚通が清水寺・美濃美江寺の爲に行つた例がしられ、山科言繼や中御門宣胤も能筆によつて各地寺社の依頼に應じた。

次にわれわれは勸進聖にも種々の階級があり勸進の流行

につれて遍歷的性格をもつ俗形法師が多くなつたことを注意しておきたい。謡曲「東岸居士」にも清水の橋を架した勸進聖が「出家にあらねば髪をも剃らず、衣を墨に染めもせで只おのづから道に入つて善を見ても進まず、智を捨てゝも愚ならず」云々とある様に勸進聖の中には俗形を呈し念佛聖、唱聞師、千秋万世法師、繪解法師等と一脈相通する者が少くなかつたのである。繪解法師の如きは拙著「鎌倉時代の庶民生活」で述べた通り、鎌倉中期から現われ、室町時代には禁中へも出入するまでになり、(御湯殿上日記)そこには勸進の行爲もあつたのではないかと考えられるのである。

四

さきに清水寺の勸進の場合に見た様に、勸進に應じうる有力者は應仁乱後は主として地方に移つたのであるが、都は何としても人口の豊かな所であるだけに、少額の寄進であつても、多數の民衆の参加を得れば或程度目的は達しえられる。従つて多くの都人の趣好に投じた方法で勸進の目的を達することが出来れば、わざわざ遠國まで募金に歩く

必要はなくなるわけである。これが勸進の興行物であり、

殊に南北朝頃より屢々文献に上る様になつた。周知の如く鎌倉時代より室町初期にかけては勸進田樂が主として行われ、以後は勸進猿樂が専ら人氣を呼んだ。而も應仁以後は觀世金春など幕府の庇護厚いもののみが獨占するのでなく手猿樂者流の勸進能もまたしきりに行はれてきたのである。これは幕府が乱後權威を失墜したことにもよるが、又大むね社寺は復興の必要に迫られ乍ら、その運動資金にも不自由で、勸進猿樂を催すしても一流の猿樂者を迎え得ず、手輕な手猿樂者でお茶を濁したことが大きな原因である。これを明應五年（1496）六月始めて催されるまで勸進猿樂が行われなかつたという大和の事情と對比すれば興味がある。いま應仁以後永祿の頃まで勸進猿樂を行つた主なる社寺を文献の上で拾つてみても、八幡・稻荷・祇園・北・賀茂・今熊野・今宮・御靈の諸社、皮堂・法性寺・眞如堂・千本閻魔堂・誓願寺・法觀寺・壬生寺・六角堂・二條道場（聞名寺）・泉涌寺等があり、恐らく記録に上らない所在の社寺の勸進猿樂は、至る所に繰りひろげられたことで

あろう。

とにかく都人をして社寺復興に關心を有たせる最良の方法は勸進の興行物であつたのである。この事は言い換えれば、都人は眞の宗教的動機からのみでは勸進に應じ難く、極めて現世的な利益や娯樂物を通じてでなければ關心を示さなくなつた事情を示すものではないだろうか。乱後盛んになつた都の念佛行事なども、兵乱による荒涼たる都市生活に對して娯樂的な潤いを與える上から好んで行われたものであろう。文明十二年（1479）といえば、乱終つた間もない頃であるが、幕府は庶民が社寺の緣日に群參し、あるいは異体の風で歩行するを禁じているのは、かえつてその盛んであつたことを思はしめるのである。

とにかく宗教的權威は都にあつては著しく低下したが、地方にあつては、なお少なからず重んぜられ、都に於て民衆の關心から遠ざけられた舊佛教の諸寺院や延喜以來の舊社は、専ら地方勸進に力を入れたのである。朝廷が地方の僧侶に對して、しきりに上人號を許されたのも、こうした情勢に併行した現象であるが、些か岐路にわたるのでこ

では割愛する。

最後に勸進の流行につれて勸進帳の作成が盛んとなると當然ここに社寺縁起の製作が到る所で見られる様になる事實を注意しておきたい。勸進状あるいは幹縁疏と云はれるものは云うまでもなく、縁起によつて復興さるべき社寺の尊さを説くことが主眼である。ここにおいて縁起のなかつた多くの社寺は競つて之を作り、中には別に繪巻物を新調して由緒を重々しく見せるに努めた。またすでに縁起が早くからあつたものでも、利益譚や奇蹟譚をつけ加え、あるいは誇張附會をほどこして一層靈驗のあらたかさを宣傳した。民衆の宗教に對する關心が現世的になればなる程、利益譚は數を増したのである。われわれは室町時代、殊に後半期に入れば、記録の上にも縁起繪巻物に關する記事を多く見るのみならず、現存する縁起にも、當時の作になるものや當時の作を基に、近世改装をほどこしたものが頗る多いのを知るのである。これ取りも直さず、當時勸進の盛んであつた事實を反映しているものであり、これがやがて檀家制度の成立にも多くの寄與をなすに至るのであるが、數々

の問題を含むが故に、詳細は他日改めて論ぜられるであらう。

之を要するに、信長の入京によつて一應天下の政局安定し、秀吉の檢地から右高制度に基づく社寺經濟の確立となるに及び、ここに勸進の流行は下火となつた。江戸時代の勸進は幕府の監視の下に、而も檀家の援助薄き場合に許されたにすぎない。また勸進の目的を達するにしても、その方法や形式には近代商業の影響をうけて、より進んだものがみられる様になつた、これについても、いまは詳論を避けたい。

註①続日本紀 天平十五十五條

②圭室諦成「中世に於ける新宗教の傳道について」(宗教研究 新一ノ四)

③大乘院寺社雜事記 文明十、四、十三及び同十六

④因みに、一昨年新聞紙の報ずるところによれば、清水寺で舞台の修理が行はれ、その工費二百万円と称せられた。舞台の修理だけでこの有様である。戦前のみならず、この時代と比較すればまさに驚くべき相違がみられるが米價によつて考へれ

ば具体的に理解されよう。当時米の和市、京都に於て平均一貫文につき、一石三斗と考へられ、この一石三斗を一昨年（昭和二十四年）一月頃の關價格に見積ると、（一升二百円と仮定して）約二万六千円となる。即ち当時の一貫文が今の二万六千円見当といふわけである。従つて貫で云へば、現在の舞台の修理は七十貫文餘りの費用しかかからないともいえるわけである。

- ⑤ 親長卿記 文明十六、六、廿七條
- ⑥ 長興宿禰記 文明九、六、廿六及び兼顯卿記 文明九、六、十四條
- ⑦ 十輪院内府記 文明十五、四、廿六
- ⑧ ③に同じ
- ⑨ 宜胤卿記 永正十五、四、十六
- ⑩ 誓願寺文書（大日本史料所收）
- ⑪ 殿助往年記
- ⑫ 右に同じ
- ⑬ 寶隆公記 永正六、二、十條
- ⑭ 長興宿禰記 文明七、四、十四條
- ⑮ 晴富宿禰記 文明十一、五、十九及び同廿八條
- ⑯ 同 文明十一、二、卅條
- ⑰ 蟠川親元日記 文明十、三、廿六

⑱ 眞生極樂寺文書

- ⑲ 親孝日記 大永元、八、廿一條
- ⑳ 言繼卿記 天文十三、八、廿四條
- ㉑ 寶隆公記 永正八、三、二條
- ㉒ 晴富宿禰記 文明十一、二、廿條
- ㉓ 長興宿禰記 文明十三、六、五條
- ㉔ 祇園社記
- ㉕ 八坂神社文書 上
- ㉖ 御靈神社文書
- ㉗ 御湯殿上の日記 天正三、三、廿六條
- ㉘ 本朝高僧傳
- ㉙ 稻場民談記
- ㉚ 清源史畧
- ㉛ 守光公記（大日本史料所收）

（本稿は去る昭和二十五年十一月三日の京都大学文学部歴史會大會に於ける研究発表の原稿に補正を行ったものである。「勸進」及び之に關連した諸問題についてはなほ論ずべきことが多いが、いま取敢えず本誌編者の原稿を求めらるるままに本稿を提出してその實をふさいだ次第である。

（筆者は京都女子大学教授・本学講師）